

## カントの生涯

林 茂 生

一一一

本年は世界の大哲イマヌエル・カントの生誕二百年祭を迎へる年である。世界各國苟も文明國と云ふ肩書のついている國ならば、皆この永遠に若き哲人の爲めに紀念祭を挙げている。カント哲學の偉大は所謂過去の哲學の集大成と云ふよりも、寧ろ彼の所謂「コペンニクス的轉回」と云つて、近世哲學の一新生命を開いた新しい創見にある。彼の哲學思想は今日の哲學思想の根抵であり、彼の哲學問題は同時に今日の哲學問題である程に彼は永遠に若い哲人である。而も彼の思索の範圍は單に純正哲學乃ち認識論の問題に止らず、自然科學より出發して、廣く宗教道德、藝術、政治、經濟等の各種の精神科學に亘りて多種多岐であり、従つてその影響の及ぼす所も極めて廣汎なりと云ふべきである。彼が獨創にかかる認識論上の自然に對する先駆的普通的立法原理は同時に道徳上の人格的自律となり、宗教上の神的理性觀となり、藝術上の美的判斷となり、政治上の自治的精神となり、又た經濟上の品位擁護律となつて居る。殆んど近代及び現代の思想にして直接間接彼の思想の影響を受けないものはないと云つてもよい位である。八十年の生涯を通じて彼の著書は大小合せて八十九種もあることは此の邊の消息を語つて居る。此の永遠に若き思想創造者の一生の質と量とは、凡人は云ふに及ばず、教養ある學者の數人若くは數十人のそれにも相當する。彼の生涯も偉なるかなと云ふべきである。

思ふにカントは斯くの如く有意義の生活を送り得たのは固より彼の天才の然らしめたのであらうけれども、又た一方に於ては、彼は極めて時間を經濟的に用ひたにも基因するであらう。獨逸の詩人ハイチがカントの

生活方法を次の如く叙述したが、如何にもカントの面目が躍如としてゐるから、茲に引用する。ハイ子曰く「カントの生涯を叙述するは容易な業ではない、實際彼は吾人の云ふ普通の意味に於ける生涯とか傳記とか云ふ様なものをして居つたかどうかは頗る疑問に屬する。彼は獨逸の東北國境と介在せる一古き町のケーニッヒスベルヒに於て終始一貫彼の機械的獨身生活を送つて居つた。私は此の町の寺院の大時計とカントの生活とを比べてどちらが正確であるかは解らぬ。カントは朝起から、コーヒーと飲み、讀書、講義、御飯、散步等に至るまで、一々時間が定つてゐて、毎日の此のプログラムを違はずして規則的生活を送つてゐた。彼の隣人共は彼が風色の上衣を着て、スマキを手にして玄關を出て、小並木の下へ向ふのを見ると直ちに午後の四時半だ事が解つた。此は彼自から稱する「哲學者の散步」に出掛けるのであつて、彼は風の吹く日にも、雨の降る日にも一年三百六十五日毎日八回づゝ此の散歩を續けてゐた。天氣が悪ければ、彼の老僕のラムペが氣遣はし、そろい、大きな傘を挿して後から隨いて行く有様は宛から佛像の行列の様であつた。彼の波瀾曲折多くして、乾坤再造とも云ふべき内面的生活と彼が十年一日の如く、否、八十年一日の如く千篇一律的な外面生活とを比較すれば、實に好い對照である。實際、若しも此のケーニッヒスベルヒの村人共が彼の抱いている思想の含んで居る偉大な意味の幾分かを知つて居つたならば、恐くは罪人が死刑執行者の前に出た如くに、戰慄せざるを得なかつたであらう。併し村の質朴な田舎翁は彼に就いて單なる一哲學教授として以外に何も知らなかつたから、彼が一定の時間に自分等の前を通ると、彼等は彼に對して快く御辭儀をして、それから自分等の時計となほしてゐた」

ケーニッヒスベルヒとの哲人カントを憶ふと共に、フロレンスの詩人ダンテを憶ひ起さざるを得ない。前者の生涯はその外面的生活の簡易にして波瀾のないに反し、後者は極めて豊富な人生の体験を持つ居た。前者は道學

的形式的の人生典型ならば、後者は藝術的漫遊的である。併し兩者共に深く人生の奥底にある魂に入り込んで無限の泉を吸い取り、遂に不朽の創造的事業を後世に遺したのに一致してゐる。此の二つのタイプを東洋の賢哲に求むれば、朱子と蘇東坡とであらう。前者は其の道學的にして在來の常識哲學的な儒教主義に理學的哲學の新解釋を與へたのは稍やカントに似て居る。後者は其の人生の豊富な経験の所有主たるのと、在來の詩人に類例ない深遠な禪味を帶びた詩趣は、やくダントンに似て居ると思ふ。人は各々其境遇に従つて或立は變化の多い人生の体験を味ふこともあらうし或は極めて乾燥無味な生活を送りながら、深く内而的生活にち入つて、其の創造性を發揮することもあらう。要は各々其の天分に應じ、理智若くは藝術の光に照され眞のオリジナリティの自己を表現し出すのは最も有意義な生活ではあるまいか。カントの生涯を顧みて、一層此の感を深くするものである。

## 知識と協同生活

特別會員

三屋清陰

「知識とは通常には、智力」若くは「學識」の意味に解釋されて居るが、元來西洋語にては「其の心を知り形を識る」ことを書ひ、友人朋友の意である。而してよく修行を積んだ碩學高徳を「善知識」と呼ぶのは、我れを知り我れを善道に導くからで、反対に我れを惡道に誘引するものは惡知識である。

以上の意味がら我れ志を同うし氣を通する士が協力して、一の事柄に當るのを、昔は「知識を勧める」と言つた。隨つて知識は心を同うする友人を指すと共に、我れを善所に導く者は、即ち善知識にして、強ち年齢